

# 研究所だより

編集・発行

千葉県長生地方教育研究所

茂原市東郷2300-1

TEL 0475 (24) 9721・FAX 0475 (23) 4820

H P <http://www.choseikaikan.or.jp/>メール [kenkyujo@beach.ocn.ne.jp](mailto:kenkyujo@beach.ocn.ne.jp)

## 「百尺竿頭一步を進む」 (長生村の教育を考える)

長生村教育委員会 教育長 木島 晃一

### 1. はじめに

長生村では、平成29年度より、0歳から15歳まで16年間を通じた教育活動「保小中一貫教育」を実施している。また、「15歳のあるべき生徒像」をイメージし、**村の宝であり、未来を切り拓く子どもたち**に下記の4つの力をも身につけさせることを目標に村全体で取り組んでいる。

1. 「社会の変化に対応できる力」
2. 「社会で役立つ学力」
3. 「社会で生きていく上で必要な人間性」
4. 「社会で生きていく上で必要な健康と体力」

一昨年度からコロナ禍の状況であり、制限がある中での教育活動であるが、長生村で実践した今年度における取組の一部を紹介する。

### 2. 長生村における取組 (令和3年度)

#### (1) 防災教育の実践

本年度、子どもたちに「防災に対する意識の向上」と「命の大切さを再認識させること」を目的とし、中学校に防災部を、3小学校に防災クラブを発足した。

経緯は、東日本大震災から10年が経つが、地震後の避難や避難所の生活で、中学生が果たした役割が大きいと報道されたことにある。小中学生のうちから防災意識を高めることは、思いやりの心、それは「社会で生きていく上で必要な人間性」を育むことになり、子どもたちがやがて大人になったときの、10年後、20年後における村全体の防災力の向上に繋がると考えている。



#### (2) グローバル教育の実践

令和元年度まで、白子町、一宮町と合同で、オーストラリア訪問による中学生海外派遣事業を実施していた。コロナ禍のため、昨年に引き続き今年度も訪豪が不可能となり、研修中止を余儀なくされた。このような状況下であるが、子どもたちに異文化理解と英語科におけるコミュニケーション能力を育む機会を設けることができないかを検討した結果、長生村独自の企画による中学生英語研修を福島県にある研修施設(プリティッシュヒルズ)で実施することとした。

3泊4日による短期間の研修ではあったが、参加した中学生(35名)の報告書の文面から、企画当初の目的が達成され、本事業がグローバル教育の一助となっていると考える。



#### (3) 道徳(情操)教育の実践

平成26年度から、長生村少年の主張大会を開催している。この事業は、中学生(各クラスの代表)と小学生(各学校の代表)が、日常生活の中での思いや考え、感銘を受けたことを自分の言葉でまとめ、児童・生徒・保護者・地域の方々の前で発表する場である。

昨年度は、コロナ禍のため開催できなかったが、今年度、会場での参観者を最小限にし、発表者以外は、オンラインによる動画配信を視聴する形態での開催とした。子どもたちが、仲間の思いを聞き、今後の生き方・あるべき姿を考えるきっかけとなる本大会が、道徳(情操)教育の大きな役割を担っている。補足であるが、毎年「中学生の主張~千葉県大会」に長生中の生徒が出場し、成績上位の優秀賞を獲得するなど優秀な成績を収めている。



### 3. おわりに

私は、年度初めの会議の中で、校長先生方に対し、学校経営をしていく上で重要視してほしい点は、子どもたちの

- ①生命の保全  
(命は地球より重い)
- ②学力の向上  
(15歳の春を笑顔で迎えられるように)
- ③人間関係の確立

であるという話をする。これは、校長先生方だけでなく先生方全員に意識してもらいたいことである。また、「子どもたちを我が子のように愛情をもって慈しみ育ててほしい。(親心の実践)」とお願いしている。

最後に、我が長生村は、「百尺竿頭一步を進む」という言葉があるように、現状に満足すること無く、次代に生きる子どもたちの幸せを願い、改革の理念に基づいた教育を実践していく覚悟である。



## 長生の教育に期待すること —研修のすすめ—

長生教育研究会 会長 古市 利行

### はじめに

今年度の長生教育研究集会分科会は、提案者、助言者、そして各研究部の部長をはじめとする役員の方々に長生村立長生中学校に集合していただき、ここをホスト会場にして各学校とテレビ会議システムで接続するオンライン開催で実施しました。全教職員が協議のために集合することはできませんでしたが、提案者の研究が管内で共有できたことは、関係者のご協力の賜物であったと感謝しています。

優れた研究が県でも提案され、さらに4本もの提案が全国に進みました。長生の研究レベルの高さを象徴するものだと思います。また、オンライン開催の前日にリハーサルの時間を設定したところ、予想以上に多くの方々が訪れ、配置や配信のための機器操作等を入念に確認されていました。長生の先生方の「より良いものをつくりあげる」という気概を強く感じました。このようなことが、長生郡市の研究レベルの高さを支えているのだらうと思います。

### 1 実践モデルプログラムと授業改善

千葉県では、平成20年度に「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」が策定され、4つの学習プロセスを踏む学習が求められてきました。学習指導要領改訂に伴って改訂されましたが、趣旨は変わっていません。

このプログラムは、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を推進していく上で、実践に結びつけやすく、ぜひ、参考資料として活用してほしいと考えます。実践モデルプログラムのWebサイトには、多くの指導案が掲載されており、そのまま実践することもできると思います。

しかし、改訂前の指導案の多くが、1時間の中に4つの学習プロセスを含んだ授業になっており、誤解を招くのではないかと心配になります。これが授業の理想的な形なのかもしれませんし、実践モデルプログラムを端的に例示する上でも都合がよい形だったと思います。しかし、実践モデルプログラムの4つの学習プロセスは、毎時間その全てを行うことを推奨するものではないと明示されています。さらに「毎時間全てを行うと、かえって形式的な授業となってしまう可能性があります。」との注意喚起がなされています。これと同じように「主体的・対話的で深い学び」についても「必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるのではなく・・・」と記載されています。

つまり、「見いだす」などの学習プロセスや対話的な学びの場面などは、必ずしも1単位時間の中に設定される必要はなく、単元などの内容のまとまりの中で、適切に位置づけるように求められているのです。したがって、まず、私たち教職員がしなければならないのは、単元全体を見渡して、どこに各学習プロセスを位置づけるのか検討し、単元の指導を設計していくことだと言えます。

### 2 本来の意義を考えること

授業改善を進める上で、単元の指導計画を検討するとすると、かなり大変なことのように感じます。「新しい学習

指導要領の考え方（文部科学省）」の「どのように学ぶか—主体的・対話的で深い学び—」において、「これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならないと浮き足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかり引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要。」「我が国の教育界は極めて真摯に教育技術の改善を模索する教員の意欲や姿勢に支えられていることは確かであるものの、これらの工夫や改善が、ともすると本来の目的を見失い、特定の学習や指導の『型』に拘泥する事態を招きかねないのではないかと指摘を踏まえての危惧と考えられる。」と記載されています。

つまり、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善では、協働的な学びなどの実践を積み上げてきており、これまでの実践をさらに改善していくことが必要なのです。加えて、私たち教職員は、児童生徒の資質・能力を育成するという目的や意義を常に念頭において授業改善に取り組むことも求められているのです。

### 3 研究と修養

千葉県総合教育センターに勤務していた時に、教育課題に対する研究や研修の企画・運営に携わることができました。研修事業がある日には、知っている先生に会えるのではないかと期待するのですが、残念ながら長生地区の先生方の参加が少なく、寂しく感じるものが多くありました。専門性の高い講師を招聘して講話をしていただきますから、根源となる考えや理論等もわかりやすく説明していただいています。「すぐに必要ない。」「忙しくて研修にいく暇がない。」と考える先生方もいると思いますが、理論や実践事例を全県から集まった先生方と一緒に研修することは、とても大切なことだと思います。研究に真摯に取り組む風土がありながら、現代的教育課題に対応した教育の在り方・方法や理論に触れる機会が少ないことは、とても残念なことです。ご存じのとおり、研修は研究と修養のことです。研究は、目の前の授業や教育的課題に関する解決策を追究することであり、修養は、知識を高めて品性を磨いていくことです。表現を変えれば、研究は、児童生徒をよくするために、修養は、自分をよくするために取り組む全ての活動と言えます。研究も修養も、児童生徒に対する教育をよくしていくための取組であり、研修は教職員にとって必要不可欠なものです。

研修には、校内研修、校外研修、OJT、個人研修などいろいろな方法があります。しかし、限られた先生方だけで研修していると、違った方向に進んでしまったり、変化から遅れたりすることがあります。長生の教育を受けた子どもたちが、国内そして世界に出て行った時に、「あれ!？」と思うことがないようにしていくため、外部で行われる研修により積極的に参加し、視野を広げてほしいと思います。長生の先生方が様々な研修に取り組めば、ますます研究のレベルが向上し、ひいては長生の教育が向上するものと考えます。



# 授業づくりコーディネーター活用のすすめ

授業づくりスーパーコーディネーター  
茂原市立茂原小学校 教諭 大貫 明宏

## 1 授業づくりコーディネーター（スーパーコーディネーター）とは？

授業づくりコーディネーター（スーパーコーディネーター）の主な活動は、以下のとおりです。

- 授業を公開する。
- 授業に関する資料等を提供・公表する。
- 授業実践への助言等の支援を行う。授業改善に関わる相談等に対し、対応する。
- 研修会や研究会等で、授業実践や研究についての発表をする。

令和3年度の授業づくりコーディネーターは、県内で126名いますが、東上総教育事務所管内では、23名です。そのうち、スーパーコーディネーターは、1名です。（コーディネーターの名簿は、千葉県教育委員会のホームページで確認することができます。）

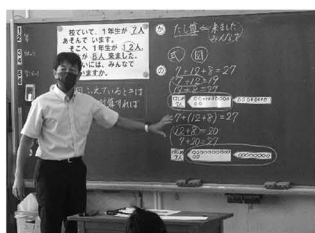
国語科	3	社会科	2
算数・数学科	5(スーパーコーディネーター1名を含む)		
理科	3	生活科	1
音楽科	1	図画工作科	0
体育科	1	道徳科	2
外国語活動 ・外国語科	3	総合的な学習 の時間	1
特別支援教育	1	ICT活用	0

東上総教育事務所管内のコーディネーターの人数

## 2 スーパーコーディネーターとして、実際に取り組んだことは？

### ○ 授業公開

他校の教員が本校に来て参観するものと、私が他校に行き出前授業という形で行うものがありました。他校からの受け入れは4名で、私が受け持っている4年生と6年生の授業を公開しました。また、出前授業の回数は7回で、1年生から6年生の授業を公開しました。出前授業では、その学校の研究に沿った授業を展開したり、若手に向けた日々の授業の展開をしたりしました。



茂原市立中の島小学校での授業

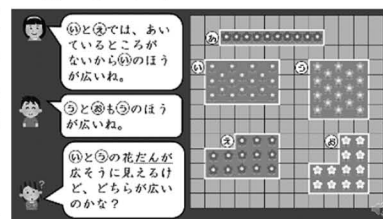


### ○ 資料提供・公表

昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、授業の公開はできませんでした。年度はじめは、

臨時休業になり、児童が家庭でも学習できるようにと、家庭学習支援用に動画を作成しました。動画作成は、ほかの教科のコーディネーター、他地域のコーディネーターとも分担して行いました。

今年度も、年度途中までは、緊急事態宣言が出されていたので、授業動画の作成をしました。今年度は、千葉県が策定した



授業動画

「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」に基づいた動画になっています。児童が自主学習するときに活用でき、また、教師が授業づくりの参考にすることができるよう構成にもなっています。（詳しくは「チーテレスタディネット」をご覧ください。）

### ○ 授業実践への助言

他校での授業を参観し、授業後に助言をさせていただきました。今年度は7回行わせていただきました。

### ○ 授業実践動画公開

学力向上交流会で授業実践を公開しました。（こちらは動画配信になり、限定配信のため、終了しました。）

## 3 活用の手続きは？

授業づくりコーディネーターの授業を参観したり、指導・助言を受けたりするには、活用を希望する学校の校長から授業づくりコーディネーターの所属校の校長へ直接依頼することになっています。日時の調整や具体的な内容については、教務主任等と連絡を取り合っていました。また、実施後は、活用報告書を千葉県教育委員会のホームページからダウンロードし、学習指導課宛に報告をすることになっています。

## 4 スーパーコーディネーターの任を終えて

コーディネーター（スーパーコーディネーター）については、年度はじめに各学校に案内されましたが、細かい点についてはまだ知られていないようです。実際に、「いつでも来てくれるんですか？」「私の学校にも来てほしいんですけど、忙しいんですよね？」ときかれました。地域の教職員の授業力向上を推進するのが、私たちの役割なので、私たちから積極的に声をかけなければならないのですが、ぜひ先生方からも気軽に連絡をしていただきたいと思います。



## 不登校等児童生徒支援のヒント

長生地区不登校等児童生徒サポートセンター 訪問相談担当教員  
茂原市立富士見中学校 教諭 村上 健輔

### 1 はじめに

令和2年度から訪問相談担当教員を仰せつかり2年目が終わろうとしています。今回貴重な機会をいただき、これまで感じたこと、学んだことを訪問相談担当教員の活動とともに紹介します。

### 2 訪問相談担当教員とは

千葉県の不登校等支援施策として県内12か所に設置された地区不登校児童生徒支援拠点校（地区不登校等児童生徒サポートセンター）に配置されている不登校等支援を専門に行う教職員のことです。長生地区のサポートセンターである茂原市立富士見中学校に籍を置き、各小中学校の依頼を受け、不登校等児童生徒や保護者に対して、スクールソーシャルワーカー（SSW）等と連携しながら家庭訪問を中心としたサポートを行っています。教育施策としてアウトリーチ型の支援をする相談員を配置するのは全国でも珍しく、千葉県独自のものです。

### 3 不登校の現状

文部科学省は「不登校」を〈何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的理由」、「新型コロナウイルスの感染回避」による者を除く）。〉と定義づけています。昨年10月に発表された「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、全国の不登校児童生徒数（国公私立小中学校）は19万人を超え、平成25年度以降増加を続けています。千葉県（千葉市を含む公立学校）では、小学校が2,691人（在籍児童生徒数に対する割合は0.88%）、中学校が5,159人（同3.52%）でした。全国と同様に平成25年度以降増加傾向にあります。

### 4 不登校支援の近年の動向

このような状況の中、国は不登校支援について大きく舵を切りました。平成28年の「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」では、

不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。

と記され、登校のみをゴールとしないことが示されました。一方で登校しないリスクについても触れられています。翌29年にはいわゆる「教育機会確保法」が施行され、学校だけではなく多様な機会や場が認められました。同時に環境や支援体制の整備が求められています。

### 5 訪問相談活動の例

- 児童生徒宅での遊びやゲームを通してのコミュニケーション。
- 朝、自転車で家庭訪問し、一緒に登校する。
- 校内の適応指導教室での勉強や相談。
- 適応指導教室（フレンドルーム）への訪問。
- 本人や家族になかなか会えなくてもポストにメッセージを入れてくる。 など

このような活動を通して児童生徒への支援を行っています。その中で、不登校の要因や背景には、いじめや友人関係などの「学校要因」だけでなく、発達的な特性や様々なことへの不安などの「本人要因」、ネグレクトや家族間の不和などの「家庭要因」と思われるケースも多く見受けられます。また、それらの要因が複雑に絡まり合っていることも考えられます。

### 6 不登校支援のヒント

次に訪問相談活動の中で感じたことや研修で学んだことを紹介します。

- 生徒理解を深めるための家庭訪問
  - 家の内外の様子、家族構成、学校までの距離等。
  - 登校しているだけでエライ！という子もいる。
- 登校したときの組織的な対応が必要
  - どこで、何をすればいいのかわからないのか。誰が対応するのか。「せっかく来たのに…」とならないように。
  - 担任だけに任せない⇔担任だからこそできることは？（少しでも顔合わせる時間をつくる。管理職や他の職員の協力も仰いで。）
  - 他の子どもたちへの前向きな指導を。本人がいつ学校へ来てもいいようにしておく。安心して出席、欠席できる環境・雰囲気づくり。
- HSC(Highly Sensitive Child)について
  - 刺激にとっても敏感で疲れやすい。（音、光、痛み、暑さ寒さ、肌触り、人混み、騒がしい所 など）
  - 人との境界線が薄い。（他人のネガティブな感情を受け取りやすい）
  - 自分の気質に合わないことに対して、ストレスが表れやすい。（嫌なことはやらない など）
  - 他の子が怒られていても、自分のことと感じてしまう。不登校の要因になってしまうことも。
- 情報を求めている保護者は多い。学校に送られてくる関係機関の情報の周知徹底
  - 子どもと親のサポートセンター主催のセミナー等（サポート広場、進路選択セミナー）のチラシ、各相談機関のリーフレットなど。
  - 情報や文書が伝わらない。→「うちの子はどうでもいいの!?!」「そんなの初めて聞きました。」「もっと早く知りたかった。」とならないように。

### 7 おわりに

「学校復帰が目標とは限らない。しかし、学校復帰を目指すことを忘れない。」研修での指導主事の言葉です。この言葉を胸に、日々活動しています。

目の前の子どもたちへの対応に悩んでいる先生方にとって、少しでもヒントになれば幸いです。



## 研修を終えて



### 初任者研修を終えて

茂原市立本納中学校  
教諭 林 功晃

初任者として1年の勤務が経とうとしています。初任者研修を通じて、教員として必要な資質・能力を多く学ぶことができたと思います。

校内研修では、初任者指導教員の先生から、発問の仕方や板書の書き方など、生徒の目線に立った多くのご指導をいただきました。特に、生徒が主体的に学びに向かえるような授業をするため、学習のねらいや課題を明確にすることや子供の実態に合わせた発問を実践することが重要であると学びました。「主体的・対話的で深い学び」になるように工夫をしながら、生徒に科学的・論理的に考える力を育んでいきたいです。

レポートによる代替研修では、「学級経営の進め方」、「特別活動の意義」、「豊かな心を育む道德教育」、「児童生徒が成長するキャリア教育の基本的な考え方」、「いじめ・不登校への対応の基本」、「共生社会の実現に向けた特別支援教育の実践」、「子供たちの人権と教職員の役割」、「日本語能力が十分でない子供への指導」、「SDGsの基本的な考え方」などの様々な講話や資料を視聴・熟読した後、教育現場における各課題について深く考えさせられました。

異校種交流協議では、教師として大切なことについて協議を行い、幼児・児童・生徒に対する実践的な指導例を学ぶことができました。どの先生方も子供一人一人に寄り添った指導を実践しておりとても勉強になりました。

校外研修では、初任者の先生方と自身の教育実践について協議を行いました。生活指導や教科指導などで同じような苦労をされている先生方と意見を共有することができ、同期の先生方と切磋琢磨しながら頑張っていこうと鼓舞されました。

他校研修では、長生村立長生中学校に行かせていただきました。授業ではICT機器を効果的に用いながら、授業を展開していました。理科の授業では、板書時間が実験活動の妨げにならないように、テレビ画面にスライドを示しながら、分かりやすく説明していました。さらに、生徒の何気ない断片的な発言を拾い、「するどい」、「なぜそう思った？」などというように、生徒の発言を展開に生かしていました。また、実験前の授業では、実験方法の絵を書かせることで、実験準備や進行においてイメージが湧き、円滑に取り組みやすくなることを学び、自身も授業の中で実践していこうと思いました。

この1年間、私は1学年の担任をさせていただきました。私の理想の学級像は「生徒一人一人が安心して通える学級」です。そのためにも、日頃から生徒の悩みや不安をよく聞き、学校と家庭が連携しながら支援を講じていくことがとても重要であると考えています。これからも研修で学んだ指導方法を実践して、理想の学級像に近づけるように日々自己研鑽に努めていきます。



### 3年目研修を終えて

茂原市立新治小学校  
教諭 高橋 美咲

採用から3年が経ちました。まだまだ分からないことは多々ありますが、初任者だった頃よりも見通しを持って取り組むことができるようになってきました。

課題研究研修では、「児童が進んで伝え、学び合う学級づくり」をテーマとして取り組みました。人見知りの児童や、自己主張の強い1年生が児童同士で伝え合うことができるようにするための手段を先輩の先生方に相談しました。基本的な発表の仕方や話の聞き方を提示すること、座席の工夫をすることなど様々なことを教えていただきました。中でも、伝え合いの様子についてボイスレコーダーを活用した児童の実態把握の仕方が心に残りました。ペアごとに伝え合う様子を録音してみると、私が聴いていないところで児童のよい発言があり、とても驚きました。そして、それと同時に私も児童も楽しさややる気で溢れてきました。また、録音したものを児童と一緒に聴くことで、よい発言や改善点に直接触れ、伝え合いの流れを整理しながら話型を作成することができました。授業研究の際も、児童同士で楽しそうに伝え合う様子が見られ、より理解を深めることができたのではないかと思います。児童の実態を基に教師自身が見通しを持つだけでなく、児童と一緒にゴールや型を決めて示していくことも大切だと学びました。同期の先生方と実践を報告し合うことはできませんでしたが、資料を交換することで様々な指導方法等を知ることができました。新たに学んだことを実践し、私自身の引き出しを増やしていきたいと思いました。

異校種体験では、特別支援学校で1日体験をさせていただきました。児童一人一人の持つ課題が違う中でも、それぞれが達成に向けてできることを一生懸命に取り組む姿に心を打たれました。さらに、個々の発達や課題に配慮した先生方の声掛けや支援の仕方もとても印象的でした。手が止まっている児童を見ると思わず声を掛けたり、手助けをしたりしてしまうことが多くあります。しかし、児童の成長のためには全てを支援するのではなく、課題を理解・把握し、適切なタイミングで指導することの重要性を改めて感じるすることができました。児童一人一人がより成長することができるよう児童理解に努め、学習、生徒指導を行うことができるようにしていきたいと思いました。

初任者研修から始まり、3年間で様々なことを経験し学ぶことができました。コロナ禍にも関わらず、研修する機会と多くの先生方から教えていただいたことに感謝し、今後の教員生活に活かしていきたいです。そして、常に学び続ける向上心を持ち、児童とともに日々成長し続けることのできる教員でありたいと思います。

## 研修を終えて



### 中堅教諭等資質向上研修を終えて

睦沢町立睦沢中学校  
教諭 西谷 真澄

初任研からこれまで様々な研修の機会をいただき、その度に学びを得ることができました。今年度は、中堅教諭等資質向上研修に参加させていただきました。昨年度に引き続き、新型コロナウイルスへの対策を行う中で、全体研修を受けることができませんでしたが、動画や資料配信を通して、教員としての倫理観や研修の在り方について学ぶことができました。担任として生徒たちとかわりあうなかで、自分の話し方や行動が子どもたちの心身に大きく影響することを改めて認識し、身の引きしめる思いです。不祥事の根絶に向けて、一人一人がどのように考えるか、そして、どのような対策ができるのかを考えさせられました。

千葉県総合教育センターによる「主体的・対話的で深い学び」についての研修では、対話的な学びと主体的な学びをどのように関連付けるか、その具体的な方法について学ぶことができました。本年度の睦沢町教育振興会国語部会では「話すこと・聞くこと」の研究を進めていますが、この研修で示された千葉県「思考し、表現する力」を高める実践プログラムを基に「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」の4つのサイクルを取り入れ、若手教諭を授業者として研究授業を行いました。新型コロナウイルスによる対話活動の制約があるなかでしたが、主体的・対話的な学びを実現するための手立てを話し合うことができました。また、校内検討会では、若い先生方の授業アイデアやクロームブック等のツールを活用した授業編成について、私自身も先生方から学ぶことが多くあり、自分にはなかった視点を得ることができ、授業を見直すきっかけにもなりました。研修や研究授業で得たことを、今後の教育実践に生かしていきたいです。

能動的自立研修ツールを活用した研修は、自分の実践や教育観を見つめなおす良い機会となりました。他校や他地域の先生方と連絡をとりあい、研修テーマについて相談しあうことで、課題だと考えていたことの別の側面に気づくことができました。また、「校内研究ガイドブック」を参考に、本年度は先生方に向けた図書館の活用についての研修会を開くことができ、参加された先生方から貴重なご意見をいただくこともできました。日ごろから悩んでいることややってみたくて考えていることを、このような形で先生方に伝え意見交換ができたことは、大変ありがたく、また心強く思いました。

本年度の中堅教諭等資質向上研修に参加し、改めて、自分の在り方を振り返ることができ、また、様々な面から学びを得ることができました。校内でも、後輩教諭が抱える悩みを共有し、意見交換や研修会を企画するなどして、よりよい職場環境をつくっていくことが求められていると実感しました。今後もこのような研修に参加し、学び続けていきたいと思えます。



### 教務主任研修会を終えて

長柄町立日吉小学校  
教諭 石浦 勇

今年度の教務主任研修会は、「教育的課題」「教務主任としての役割」「GIGAスクールについて」をテーマに様々な講話をいただきました。

「教育的課題」の講話で特に印象深かったのは、まず、「これからの教育課程の理念」についてです。コミュニティスクールの導入が各地で進められている昨今、子ども達が社会や世界と向き合い関わり合うこと、学校が社会と共有・連携しながら教育課程の実現を図っていくことの重要性を考えさせられました。次に、主体的な学びの具体的な取り組み方です。すでに授業では当たり前のように取り入れられていますが、学校全体で主体的な学び・対話的な学びとは何か、意思統一するための具体的な手立てのポイントを教えてくださいました。教育課程をまとめる立場として、有意義な研修になりました。

「教務主任としての役割」についての講話では、教務主任としての意識のもち方について学びました。先生方から信頼され、本音を聞けるようになること、広い視野をもって学校行事や教育課程に携わること、管理職の意図を理解し実現すること、そして、常に学び続ける姿勢をもつことの大切さを再認識しました。私自身、その中でも特に、広い視野をもち、先を読み、熟考した提案を今以上に心がけなければならないと感じました。また、「点を線に、線を面にと考えられる教務主任」という言葉にハッとさせられました。自身の行ったことを繋ぎ合わせるだけではなく、先生方の行っていること、これまでの積み重ねて来たものを繋ぎ合わせていくことで物事を形作ろうという意識を明確にもっていませんでした。意識のもち方、ものの見方が広がった研修会でした。

「GIGAスクールについて」の講話では、柏市の1人1台端末の活用について知ること、私たちもどのようにICTを学習に取り入れていくかを考えさせられました。柏市では、学力向上のためのツールとして、協働作業での活用、デジタルコンテンツを活用した思考錯誤の取り組み、プログラミング学習など、積極的に学習に取り入れていました。また、情報モラル教育をしっかりと進めると共に、休み時間に自由に端末を触ることができるようにすることで、操作方法を自ら学べるようにしていました。実践事例を見て、ICTに学力向上のためのツールとして大きな可能性を感じると共に、より良い活用を試行錯誤していかなければならないという意欲が高まりました。

本年度の研修を経て、私は教務主任として先生方をより良い方向にまとめると共に、管理職との潤滑油になるための姿勢を学びました。教育課程における近年の課題と必要な取り組みについても学んだことを学校現場で発揮できるよう、精一杯取り組んでいきます。

最後になりますが、本年度の教務主任研修会にてご指導くださいました講師の先生方や関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

# 令和3年度千葉県長期研修生 研究報告



〈国語科〉  
茂原市立豊田小学校  
教諭 渡邊 紘志

主体的な読者を育み、多角的に読む力を高める指導の研究  
～記念館活動を通じた多様な読書活動やICTの活用による協働的な学習の実現～

## 研究主題について

文学の学習指導は、教科書教材の心情読解が中心であり、児童にとって受動的な学習になりやすいことや読書との連動が少ないことに課題がある。また、コロナ感染症による交流の制限やICTの効果的な活用など新たな学習の形が模索されている。

そこで、複数の宮沢賢治作品を多様な読書活動を通して主体的に読み、多角的に解釈したことを展示物に表現することや異質性のある他者と協働的に学習するためにICTを活用することを組織した記念館活動の単元を開発した。この記念館活動は主体的な読者を育み、多角的に読む力を高めると考え、本主題を設定した。

## 研究目標

多様な読書活動が伴う展示物づくりや異質性のある他者との協働的な学習のためにICTを活用する記念館活動は、読書に親しむ主体的な読者を育み、自己の考えの形成を促し、多角的に読む力を高めることに有効であることを明らかにする。

## 研究の概要 (第6学年)

- 主体的に考えを形成し、多角的に読む力を育成  
展示物づくりでは、4種類の教師見本(仮想対談、アンソロジー、登場人物リサーチ、名文リサーチ)を用意した。その分析からテキストの見方や意味生成の能力とともに、展示物に応じた多角的な読み方を身に付けさせた。また、複数作品の共通点や相違点を見出し、探究することで自らの読みを調整しながら、多角的に読む力を高めることができた。
- 多様な読書活動を通して読書に親しむ読者を育成  
絵本や文庫、伝記等の多様なテキストを約100冊用意し、読み聞かせや並行読書等の多読を通して、読書に親しむ態度を育てた。また、読書が考えを広げ、展示物に生かされていることを実感する読書活動を展開することで、読書の意味や価値を感じる読者の育成につなげることができた。
- 異質性のある他者とのICTを用いた協働的な学習  
宮沢賢治研究者や岩手県花巻市の小学生とZoomを介した協働的な学習を行った。協働して課題を解決する中で、風土やこれまでの学習過程の違いが読みの解釈を広げるとともに場所にとられない新たな読む学習指導の価値を生み出すことができた。



## 研究のまとめ

目的と相手意識を明確にもつ記念館活動は、多様な読書活動が営まれ、主体的な読者の育成や多角的に読む力を高めることに有効であった。読書量の増加はもちろん、展示物づくりや異質性のある他者との協働的な学習で得た多様な読み方や解釈は、今後の読書活動にも広がりをもつことが期待できる。



〈体育科〉  
茂原市立五郷小学校  
教諭 佐藤 章雄

陸上運動における技能向上につながる対話型学習の在り方  
～子供とつくるコミュニケーションデザインマップの活用を通して～

## 研究主題について

現在「思考・判断・表現」は、児童が思考し、判断したことを他者と共有し、伝え学び合う場面を設定し、その思考・判断・表現の状況を評価していくこととなる。しかし、特に思考・判断の状況は目に見えにくいので、どの程度思考・判断しているかといったレベルでそれらを実践することは難しい。そこで本研究では、技能向上につながる具体的な対話を「伝える」「聴く」の2観点に分けて児童と評価指針を作成した。これを活用して児童相互評価を取り入れるとともに、対話型学習を軸として授業展開する中で2つの力がどのように高まり、技能向上につながったかを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

## 研究目標

「短距離走・リレー」の学習において、児童とつくる「コミュニケーションデザインマップ」(以下CDM)を活用し、対話型学習に必要な「伝える力」「聴く力」を身に付けることが、児童のリレー技能の向上に有効であったが授業実践を通して明らかにする。

## 研究の概要

- 児童の発話分析・対話分析  
全発話数18302個を発話カテゴリーに分類し、各チームの励ましやアドバイス、応答等の「対話的フィードバック」の割合を1時間ごとに算出した。単元が進むにつれて多くのチームの対話的フィードバックの割合が向上した。技能向上につながるリレー成功得点と対話的フィードバックの割合にかなり強い相関関係が認められ、双方が密接に関係していることがわかった。
- CDMの分析  
ア リレー成功得点と相互評価の相関関係  
全授業の相互評価得点とリレー成功得点の平均の相関分析を行った結果、相互評価得点が上がれば、リレー成功得点も上がるということがわかった。  
イ 「伝える力」と「聴く力」の相関関係  
単元終わりの2つの力の相関分析を行った結果、一方の得点が上がればもう一方の得点も上がり2つの力は密接に結び付いていることが分かった。  
ウ 自己評価と他者評価の相関関係  
「伝える力」については、単元前半でも後半でも強い相関関係が認められたが、「聴く力」については、CDMの修正・公開後に自己評価が最も近づいた。

## 研究のまとめ

技能向上につながる双方向による対話的フィードバックを繰り返すことで技能の向上に結び付いたのではないかと。また「伝える力」は言葉で表現するため、自己評価とも分かりやすく、評価しやすい項目であったが、聴く際の際の傾聴具合が目に見えないため、相手がどのくらい聴いているのかが分かりづらく、評価しにくい項目だったのではないかと。このことから「聴く力」は、具体例を示しながら丁寧に授業で指導する必要があると推察される。

# 令和3年度千葉県 長期研修生 研究報告



〈小学校外国語科〉  
茂原市立東郷小学校  
教諭 大多和 絵美

自分で考え、伝え合う英語力を育てるSmall Talkの指導  
～相手意識をもって、主体的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成～

### 研究主題について

小学校学習指導要領外国語科では、目的や場面、状況などに応じて、他者に配慮しながら、主体的に伝え合うことができるコミュニケーション能力の育成を目標としている。一方、これまでの外国語教育の課題として、高学年における体系的な学習や、発達段階に応じた系統的な学習が不十分であることが挙げられている。やり取りの活動において、既習表現と新出表現を関連付けた系統的なSmall Talkの指導を行うことで、自分で考え、伝え合う英語力が育ち、相手意識をもって主体的にコミュニケーションを図ることができる児童を育成することができると考え、本主題を設定した。

### 研究目標

話すこと〔やり取り〕の活動において、目的や場面、状況に応じて、自分で考え、伝え合う英語力を育成するためのSmall Talkの指導実践を通して、その指導効果を検証する。

### 授業の概要（第6学年）

#### （1）ダブルSmall Talk

やり取りの場を増やすため、毎時間、授業の始めと終わりに1回ずつ、計2回Small Talkを行った。授業の始めのSmall Talkでは、既習表現の内容や定着を目指した内容、授業の終わりのSmall Talkでは、授業の振り返りの一環として各時で学習した新出表現の定着を目指した内容で行った。

#### （2）系統的なSmall Talkの指導

既習表現と各単元の学習内容やゴールを照らし合わせたSmall Talkの指導計画を作成し、それに沿って活動を進めた。また、会話を続けるための基本的な表現も段階的に指導を行った。

#### （3）ICT機器を利用した振り返り

Small Talkの様子を児童用端末に録画し、それを見返すことで、自分のやり取りの様子を客観的に振り返ることができるようにした。録画したものは教師用端末に提出させ、教師は評価に活用した。

### 研究のまとめ

Small Talkの活動において、系統的な指導を行い、言語材料を活用する場を意図的に繰り返し設定することで、目的や場面、状況などに応じて、自分で考え、伝え合う英語力を育成することができた。また、Small Talkでのやり取りや、ICT機器を利用した振り返りを通して、学習した言語材料や会話を続けるための基本的な表現を身に付けるだけでなく、相手に分かりやすく伝えようと工夫するなど、相手意識をもって主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成することができた。話す力は一朝一夕に身に付くものではないが、継続することの効果は大きい。児童の伝え合う力を伸ばすためにも、Small Talkを積極的に活用していきたい。

## 教育功勞表彰

本年度の教育功勞等の表彰において、次の先生や団体が、日頃の教育活動のご功績を認められ表彰されました。心よりお祝い申し上げます。なお、掲載順につきましては、表彰の名簿順とさせていただきます。  
(敬称略)

### ○地方教育行政功勞者表彰（文部科学大臣表彰）

白子町教育委員会 教育委員 大多和直樹

### ○文部科学大臣優秀教職員表彰

茂原市立茂原小学校 教諭 大貫 明宏  
茂原市立富士見中学校 教諭 椎原 政文

### ○千葉県学校体育功勞者表彰

茂原市立二宮小学校 校長 佐藤 功

### ○長生地区市町村教育委員会連絡協議会表彰

#### <個人>

茂原市立豊田小学校 校長 青木 聡  
茂原市立二宮小学校 校長 佐藤 功  
茂原市立西小学校 校長 松村 暁雄  
茂原市立中の島小学校 校長 阿部倉光宏  
白子町立白子中学校 校長 中田 宏  
長南町立長南小学校 校長 齋藤 悦子  
長南町立長南中学校 校長 保川 浩基

#### <団体>

長生郡市広域市町村圏組合教育委員会  
視聴覚教材センター教材開発委員会

### ○白子町教育委員会教育功勞者表彰

白子町立白瀧小学校 教諭 今関 孝二  
白子町立関小学校 教諭 今関 知美

### ○長柄町教育委員会教育功勞者表彰

長柄町立長柄小学校 教頭 小高 俊哉  
長柄町立長柄小学校 教諭 風戸 洋子  
長柄町立長柄中学校 教諭 石井 勲